

<<口頭発表>> (9月22日 16:15-16:45)

【K棟104】

日常会話にみられる類像化作用
—自己の否定的側面に関するスタンス表出の語りから—

合崎 京子

本発表は、日常会話の中で、他者と共有し難い経験を持つ人が、自己の否定的な経験を語る際の形式に注目し、その中で「類像化作用 (iconization)」(Silverstein, 1993) がどのように創出されているか、また、語り手がその経験に対峙する自らのスタンスをいかに表現するか、考察を行うものである。具体的には、自閉症スペクトラムという、直截的には可視化されにくい症状を持つ人が、社会的背景をほとんど共有しない初対面の他者に対して行った、自己のスタンスを示すときの語りに見られる類像性に着目し、分析を行う。

以上の結果、本事例で取り上げた自閉症スペクトラム者は、自己の否定的な経験を語る際に、自らの生きる社会文化に根付いた形式の反復や類似した語彙を用いており、それによって類像化作用が機能し、初対面の他者にも社会文化的に認知可能なスタンスを示すことが可能になっていることが考察される。

<<口頭発表>> (9月22日 16:50-17:20)

【K棟104】

自閉症スペクトラムの青年の相互行為
—療育者からの極性疑問文に対する応答能力—

細田 由利, 亀井 恵里子, David Aline

本研究では療育者が自閉症の青年に向けて極性疑問の質問を行った際に、質問に対して自閉症の青年がいかにして応答するのかを検証した。分析の結果、自閉症の青年は通常前の発話の部分的な繰り返しにより応答するか、或いは「楽しかった」、「頑張った」などの型にはまったような発話をしていることがわかった。本稿では前者の繰り返しによる応答に焦点を当てる。自閉症の青年の応答は単に前の話者の発話の一部を繰り返すのではなくイントネーション的にも文法的にも変化させており、この自閉症の青年の相互行為能力を見ることができる。

<<口頭発表>> (9月22日 17:25-17:55)

【K棟104】

高齢者にできることに関する知識はいかに更新されるか
—認知症高齢者施設における利用者と職員の相互行為—

細馬 宏通

認知症高齢者施設において、職員は意識するしないにかかわらず、利用者に何ができるかを予測しながら相互行為を行っている。利用者のできることは環境によって異なり、時間とともに変化していくため、職員は利用者に対する知識を日々更新し、予測を立て直していく必要がある。では、利用者に対する知識はどのような機会によって更新されていくのだろうか。本発表では、職員と高齢者の共同作業において、職員がどのように作業役割を組織化しようと試みるか、そしてその試みが停滞するときどのような修復が起こるかに注目する。具体的には、洗い場での洗いものを扱う作業、玉ねぎの皮剥き、吊し柿の紐結びなど、施設で自然に観察されるやりとりを事例分析することによって、高齢者と職員との相互行為を通して役割分担が更新される過程を記述する。

<<口頭発表>> (9月22日 18:00-18:30)

【K棟104】

三味線の稽古場面における師匠と習い手の相互行為
—マルチモーダルな指導における発話形式の使い分け—

名塩 征史

近年では、スポーツや格闘技、楽器の演奏といった特定の身体的技術の教授について盛んに研究されているが、こうした身体的技術や身体知の一部は言語化が難しく、その教授には言語だけでなく、非言語的・環境的資源の利用やそれらに特定の認知的枠組みが必要であると考えられる。本研究は、上記のような考えに基づき、師匠と習い手が一対一で向かい合って行う三味線の稽古場面を会話分析的手法を用いて分析・考察するものである。本発表では特に、師匠によるマルチモーダルな指導を構成する発話形式の多様性に注目する。稽古中の師匠の発話は、1)曲に合わせて歌われる長唄、2)習い手に向けて発せられる指導と激励、3)三味線の音（調子）を声で表現する「口三味線」の三つに分けられる。本発表では、これらの各発話形式の機能とその継時的・場当たりの組織化に焦点を当てた分析と記述を試みる。

<<口頭発表>> (9月22日 16:15-16:45)

【K棟203】

言語変化と社会的ネットワーク分析の重要性

平野 圭子

本研究では方言接触の結果、話者の言語行動に起こり得る変化を説明するうえで、個々の話者の社会的ネットワークが言語行動に与える影響を分析することの重要性を提示する。日本在住英語母語話者コミュニティ内の英語方言接触によって誘発される文法バリエーションと変化を調査した、「義務を表す英語表現」(must, have got to, have to, got to)と「所有を表す英語表現」(have got, have, got)の2つの研究を取り上げ、その分析結果を言語的アコモデーションと社会的ネットワークの観点から考察する。イングランド、アメリカ、ニュージーランドのインフォーマントを出身国別に統計分析した結果、イングランド出身のインフォーマントに来日一年後に観察された傾向は、2種類の英語表現ともアメリカ英語からのダイバージェンスであったが、個々のインフォーマントの傾向は一様ではなく、それぞれの社会的ネットワークに影響を受けることが判明した。

<<口頭発表>> (9月22日 16:50-17:20)

【K棟203】

EFLグループ相互行為内でのAcademic Discourse Socialization
—大学グローバル教育プログラムにおける言語学的エスノグラフィー研究から—

抽冬 紘和

本研究は、大学グローバル教育プログラムにおける、留学生、日本人学生からなるクラスルーム、グループ内での言語社会化に関するエスノグラフィー研究より、異文化間EFLグループ相互行為内での、学習者のacademic discourse socializationの過程に関する分析を実施した。データ分析の結果、次のスキルがアカデミックディスコース参加に求められる能力であることが分かった。1) グループに参加する、2)グループ内の出来事を観察する、3) グループで何をすべきかを知る、4) グループ中心となる、5) グループ内で共通の言語レパートリーを状況に応じて使い分ける。これらの能力1)から4)は段階的に習得され、学習者の社会化の過程が見られた。5)言語レパートリーの使用に関しては、1) から4)とコミュニケーション能力が発達していく過程でのコミュニケーション能力であるということがわかった。

<<口頭発表>> (9月22日 17:25-17:55)

【K棟203】

多言語話者高校生の言語認識と「戦略的 CS」
—「場」の期待と逸脱—

佐藤 美奈子

本研究は、メタ言語意識、コミュニケーション感受性、言語選択機序に関する諸理論に基づき外国人受け入れ校を対象におこなった言語意識調査と言語使用調査から多言語話者である外国籍高校生が自身の多言語能力を戦略的に利用する例としてCSに着目する。「互いの関係構築」(Tradgill, 1983)は言語機能のひとつである。単一言語話者が対話者との親疎・上下関係から相手との間合いを取り単一言語内のスピーチレベルを調整するように、多言語話者は、複数の言語にわたり「最適の関連性」(Sperber & Wilsson, 1995)を模索し特定言語を選択する。それを可能にするのが「言語TPO」を嗅ぎ取る、多言語話者の鋭敏な「場」の認識である。本研究は、生活言語と学校言語の使い分けを求める環境の「期待」に副うために、あるいはあえて逸脱することで多言語話者高校生が繰り広げる「戦略的CS」に着目し、多言語話者のCSを「場」と話者の言語認識も含め総合的に解釈する。

<<口頭発表>> (9月22日 18:00-18:30)

【K棟203】

米国大統領ドナルド・トランプ氏の演説における、非正規若者移民に対する差別的な談話ストラテジーの分析

ーメキシコのペニャ・ニエト大統領の移民に対する談話ストラテジーと比較してー

廣瀬 由奈

本研究は、米国大統領ドナルド・トランプ氏の演説を分析することでDACA (子供時代に親に連れられて入国した非合法移民を保護する制度)対象者である非正規若者移民に対する差別的な談話ストラテジーを分析し、移民が指導者の談話によって「犯罪者化」「部外者化」され、それが社会で再生産される様を明らかにするものである。またメキシコのペニャ・ニエト大統領の演説を分析し、移民に対する談話ストラテジーが各国の指導者によってどのように異なるのか比較分析を行う。

本研究で理論的枠組みとして用いる批判的談話研究では、権力的および差別的な価値観がどのように伝えられ、生産されるのかを分析する。方法としてはコーパス言語学の技術を使用し、コロケーション分析を中心に様々な談話ストラテジーの分析を行う。

<<口頭発表>> (9月22日 16:15-16:45)

【L棟102】

災害時に必要となる語彙に関する研究
—「平成28年熊本地震」後1か月の新聞一面データの語彙調査—

津田 智史

本研究は、災害時に在留外国人を情報弱者にしないために、災害時にどのような語彙が使用されているのか、また必要となるのかについて、「平成28年熊本地震」後1か月の熊本日日新聞の一面の語彙データを基に述べるものである。どのような語彙が実際に使用され、どういった時期にそれらの語が重要となるのかについて、ひとつのケーススタディとして示すものである。

テキスト化したデータを形態素解析して集計し、また災害後3日、1週間、半月、1か月というように時期を区分し、新聞一面に現れる各語の数や割合がどのように推移しているのかについて分析した。その結果、常に出現割合の高い語、時期により割合の増加する語/減少する語、災害後やや間をおいて出現する語など、いくつかの傾向がみられた。加えて、それらの語彙難易度についても確認することで、今後の災害時コミュニケーションに関する課題を示す。

<<口頭発表>> (9月22日 16:50-17:20)

【L棟102】

わかりやすさを目的とした文章における句読点と改行の多寡
—「ステージ」レイアウトリニューアル前後の比較分析から—

岩崎 拓也

本研究では、知的障害者にとってのわかりやすい文章とは何かを考察するために、情報提供を目的とした「ステージ」を対象として取り上げ、句読点と改行を計量的に分析した。

分析は、当事者が編集に参加し始めた54号の前後でデータを2つに分け、句読点の使用の異なりと改行の位置の違いから、日本語の文章のわかりやすさと見やすさの一端を明らかにすることを試みた。分析の結果、句読点の平均と分散は、リニューアル後のほうが少なく、改行は、平均はリニューアル後の方が多いいものの、分散は小さかった。また、改行直前の形態素の品詞には対応分析を行った。その結果、リニューアル後では、補助記号と助詞の直後での改行が多いことがわかった。

これらの結果から、リニューアル前は、文を短くすることでわかりやすさを示していたが、リニューアル後は、読点だけでなく改行も併用することで、わかりやすい文章となるように試みていることがわかった。

<<口頭発表>> (9月22日 17:25-17:55)

【L棟102】

創造的慣習性,あるいは慣習的創造性
—誤表記にみる慣習とせめぎ合う文法の姿—

吉川 正人

本発表では, 音声書き起こしやウェブ上の英語に見られる "The funny this is ..." 等の破格的な [the 形容詞 this is] 表記 (以下「当該表記」) についての考察を通して, 慣習性とせめぎ合う文法の姿を素描する. 論点は以下である:

1. 当該表記は [the 形容詞 thing is] が音韻縮約により音変化したことで生じた表記である
2. thingがthisと表記されるのは, 1によって「thing ではない」と判断され, 類似の音を持ち一定以上の頻度で生起する慣習化されたフレーズであるthis is ...が想起されたためである
3. 1, 2が正しいとすれば, 音声認識はより大きな単位が優先され, 合致するフレーズが存在しないとみなされた場合は, 部分を構成するより小さい単位での照合が行われる, ということを示唆する
4. 帰結として, ヒトは単語合成ではなく, 適切な表現全体を選択し, 必要に応じて最小限の分析を行い部分をつなぎ合わせることで表現生成を行っていることが示唆される

<<口頭発表>> (9月22日 18:00-18:30)

【L棟102】

言語文化的視点から見た花の詩的表現についての考察

—花ことばのレトリックを中心に—

段 静宜

長い歴史の中で、花は人間に影響を与え続け、今日でも我々の日常生活を彩るかけがえのない存在である。人間の文化は、いろいろな面において花の文化によって特徴づけられている。言葉は文化の反映であり、花の文化とのふれあいは我々の言葉の世界に深く浸透している。

花ことばは、社会文化的な背景や民族文化の心理などの特徴を反映している。文化背景や自然環境の相違によって、各地域や国の花の文化に多様性が認められる。このような差異を理解することは、各地域や国の社会文化と民族心理をより深く理解することに通じる。

本発表では、言語文化的な視点から、バラなどのヨーロッパの代表的な花ことば、そして桜、椿などの日本の伝統的な花ことばを具体的に考察していく。さらに、日本と西洋の花ことばの対照研究を通して、花に関する文化の比較を試みる。以上の考察に基づいて、異文化コミュニケーション及び外国語教育に関する新たな考察を試みる。

<<口頭発表>> (9月22日 16:15-16:45)

【L棟104】

気づきにくい学習者／母語話者間のミスコミュニケーション

—V-テミルと韓国語V-boda, タイ語 *boŋ -V- duu*, クメール語 *sa:k -V- mət*との対照を通じて—

金谷 由美子, POONVONGPRASERT Thanit, BANGSAEN Pichamon, KUY Siemkiang

本発表は「試行」を表す形式V-テミルの使用場面における学習者／母語話者間のミスコミュニケーションの存在を指摘し、それがV-テミルの言語化されていない意味が学習者に共有されていないことによって引き起こされていることを主張するものである。V-テミルは、単に「試行」を表すだけでなく、命令・指示・提案・依頼における緩衝表現としての役割や、控えめな意志表示や願望表示、婉曲的な断り、会話の展開ストラテジーとしての前置き等の様々な談話機能を持つ。このようなV-テミルの運用面でのはたらきが母語の「試行」形式のそれと異なる場合に母語の負の転移が原因と見られる誤用や非用が起きているという実態があるが、これまであまり問題にされてこなかった。本発表では、V-テミル同様、「見る」という意味の動詞を含む「試行」形式である韓国語V-boda, タイ語 *boŋ -V- duu*, クメール語 *sa:k -V- mət*とV-テミルを対照させることによって問題の背景を浮き彫りにする。

<<口頭発表>> (9月22日 16:50-17:20)

【L棟104】

中国人日本語学習者のライティングの学習状況と学習意識に関する調査

余文龍

中国の日本語ライティング教育現場において、今の学習者の学習状況、学習意識とニーズを把握し、それにふさわしい改善策が必要であると考えられる。本発表は、中上級中国人日本語学習者の作文の学習状況と学習意識について調査を行い、そこに存在する問題点を把握したうえで、今後の改善策を検討することを目的とした。N2に合格した学習者50名にアンケート調査を行い、一部の学習者にインタビューを行った。

その結果、①学習者は作文学習に不満があることが観察される；②学習者が多用をしている共通の作文学習ストラテジーが存在する；③多くの学習者は母語話者のフィードバックを強く期待するにもかかわらず、中国人教師と学習者同士のフィードバックも参考にしたいという傾向が見られ、今後の作文教育のフィードバックを組み合わせ方とやり方への検討が示唆された。本発表は、今後の中国人日本語学習者向けの作文学習方法の可能性についても言及する。

<<口頭発表>> (9月22日 17:25-17:55)

【L棟104】

ドイツにおける難民へのドイツ語学習支援活動

荒木 萌

本発表は、近年のドイツにおける大量の難民受け入れ以後のボランティアによるドイツ語学習支援についての考察である。国は移民・難民に対するドイツ語教育として統合コースを行っているが、統合コースの受講許可は難民の法的地位や出身国に左右される。そこで、統合コースの受講許可を持たない難民はボランティアのドイツ語教室等でドイツ語を学習する。しかしボランティアの活動には限界があり、参加者のドイツ語に対する学習意欲の差や教授法の限界等の課題を抱えている。そこでボランティアは統合コースを行う民間のドイツ語学校と教材や教授法、情報等を共有し連携をとっている。本発表では、統合コースとボランティアのドイツ語学習支援のそれぞれの役割を明確にし、難民の言語学習におけるボランティアの意義および、民間のドイツ語学校とボランティアの連携により言語学習支援が効率的に実施されていることを明らかにする。

<<口頭発表>> (9月23日 14:20-14:50)

【K棟104】

人はなぜことわざを使うのか
—コーパス日本語会話における位置とはたらきの分析から—

谷畑 美咲

本研究は日本語の会話の中でことわざはどのような時に使用されるのだろうか, という問いを解明するために, ことわざが会話の中でどのようなはたらきをするかを「会話中の連鎖上の位置」という観点から探ることを目的とする. 日本語母語話者同士の電話会話コーパスデータを会話分析の手法を用いて分析した結果, 「話題を終わらせる」ことと, 「褒めや個人的なトピックから話題の主を遠ざける」という2つのはたらきがあることが分かった. 前者は, 話題の凝縮度が高く, さらに端的な評価が含まれているという, ことわざが元来持っている特長を利用して, ひとことでその話題に対する, 的をえたエッセンスを伝えることより達成されている. そして後者は発話内容を一般化することにより達成されている. つまり, 我々はことわざを使うことで他の言い方では解決することが出来ない, 会話の参与者たちが会話中に直面する様々な課題をクリアしているのだと言えよう.

<<口頭発表>> (9月23日 14:55-15:25)

【K棟104】

会話に現れる架空の物品に対する認識の共有
ーテーブルトークロールプレイングゲームにおける参加者の発話と行動に着目してー

井上 雄太

本研究では、複数人の参加者が協働して架空の状況を構築する会話における状況の共有過程の一端を、参加者の目の前に存在しない物品が提示され共有される手続について、主に会話分析の手法に依拠して検討する。分析データとしては、親しい友人同士で行われたテーブルトークロールプレイングゲームと呼ばれる遊びの中で生じた会話を用いる。

分析の結果、参加者の一人によって架空の状況内に提示された物品は、相槌や笑い声による参加者のぼんやりとした承認やその使用を通し、架空の状況にそもそもあったものとして扱われることが明らかになった。否定がなされる際、承認の過程はようやく遠回しな形で発話に現れるものであった。また、もし物品の像をより精緻にする発話がなされたとしても、承認がなされなければ、物品の像はたとえば機種のはっきりしない「電話」といった精緻化されないあやふやな形のまま取り扱い続けることが可能であることが明らかになった。

<<口頭発表>> (9月23日 15:30-16:00)

【K棟104】

UNOにおけるルール交渉
—参加者間の知識差と相互行為的「チーム」形成—

中村 香苗

本研究では、UNOの遊び場面の録画をもとに、複数の参加者間でのルール調整が相互行為としてどのように組織立てられているのかを探究する。データとして大学生4, 5人にUNOで遊んでもらったところ、どのグループもゲーム開始前あるいは途中で必ずルール調整のやりとりが起こった。分析では3つの例に焦点を当てて、ルール調整開始から終了までの過程を、特に参加者のUNOの習熟度が会話の参与枠組みにどう影響するのか、さらにルールを共有している者同士の「チーム」としてのふるまいが交渉の展開にどう関わるのかに注目して分析する。その結果、1) 知識のない者は交渉に参加しない、あるいは参加させてもらえないこと、2) 参加者間で知識に偏りがある場合、チームトークは知識の権威性を示し相手を強く説得する実践となること、3) 知識に偏りが無い場合、最終的には先にチームを形成した方のルールが採用となることが明らかになった。

<<口頭発表>> (9月23日 16:05-16:35)

【K棟104】

誰が物を渡すのか？

—多人数会話において物の渡し手が決まる過程の微視的分析—

門田 圭祐, 牧野 遼作, 山本 敦, 古山 宣洋

他者から物を受け取る, または他者に渡すといった物の受け渡しは, 日常生活中で頻繁に観察される, 人々の相互行為実践である. 本発表では, この実践において, 受け渡し前に特定の参加者を物を渡す者に指名していないとき, それにもかかわらず, 参加者たちが受け渡しを滞りなく達成していることに着目する. 特に, 物の受け渡し依頼に対して, 複数の渡し手候補のうち1人が, 依頼者に物を渡す過程について微視的な分析を行った. その結果, 参加者たちが, 物を見つけたことの表明と物を取れない姿勢の保持を通して渡し手候補から撤退していき, 最終的に撤退しなかった参加者が渡し手になることが見出された. この過程において, 受け渡される物の近くにいる参加者が渡し手として優先されること, また, 物から遠く離れた参加者は, 物の近くにいる参加者が渡し手になるように候補を絞り込むことで, 渡すことの協力者としてふるまっていることが示唆された.

<<口頭発表>> (9月23日 14:20-14:50)

【K棟203】

日本語とアラビア語エジプト方言における不満表明に関する考察
—不満表明と応答からなる不満談話シーケンスに着目して—

ASAD Marina Bahaa

本研究は、日本語とアラビア語エジプト方言における不満談話シーケンスについて、親疎関係や応答発話による影響に焦点を当て、両言語の共通点と相違点を解明することを目的とする。分析手法として、エジプト人の学生100名と日本人学生40名を対象としたロールプレイ調査を実施し、そこでの音声会話を文字化した会話資料に対して山岡(2008)の「発話機能論」に基づくラベリングを行い分析した。

その結果、応答発話に関しては、アラビア語エジプト方言では《自己弁護》の責任回避機能が用いられやすいのに対し、日本語では《謝罪》の発話機能が主となること、また親疎関係の影響としては、両言語とも親しい相手に対しては《非難》の明示的不満表明を行うのに対し、日本語では親しくない相手には《忌避》の発話機能を使用する傾向があること、さらに不満談話シーケンスの長さに関しても親疎関係が両言語で異なった影響が存在することが判明した。

<<口頭発表>> (9月23日 14:55-15:25)

【K棟203】

日本語母語場面と日中接触場面における「断り」言語行動の一考察
—「察し合い」の談話展開とそこに見る配慮表現—

高揚

本研究では、I-JAS（国立国語研究所）のRP2（断り：ホールから調理に変わるように依頼され断る）のデータを使用し、日本語母語場面と日中接触場面の「断り」における「察し合い」の談話展開と配慮表現を考察した。分析は日高（2012）で指摘された「察し合い」の談話展開の枠組みから行い、次のことを明らかにした。

母語・接触場面ともに「察しの仕向け」と「察しの返し」を兼ねた「察し合い」の談話が展開し、聴者への配慮表現として言いさし表現、あいづち表現、否定的マーカが見られた。接触場面では、母語話者は和語を漢語に替えるストラテジーを使用して配慮を示したが、学習者では母語話者が頻繁に使われる「察しの返し」の表現は見当たらなかった。本研究から、学習者は「察し合い」の談話展開と配慮表現に関する知識を活用すべくことを主張する。

<<口頭発表>> (9月23日 15:30-16:00)

【K棟203】

話題転換タイプによる話題転換表現の使い分け
一日中両言語の雑談会話の話題開始部において一

朱 怡潔

我々は次々と話題を導入していくが、前の話題との関係性により話題導入に使用される言語表現も異なるという傾向があるようである。本研究は、友人同士の雑談会話を対象に、話題開始部にある言語表現に限定し考察を行った。共通点として2点を挙げたい。1) 話題転換の際、直前の話題と関係のある場合は転換を明示するマーカーが特に必要ないが、スムーズに進行していくために言いよどみ表現が多用される。2) 全く無関係の話題の導入に伴う唐突さを軽減したり、聞き手の会話理解を助けるために認識の変化を示す表現の多用が考えられる。一方で、相違点について、日本人は話題となる事柄を際立たせる表現を愛用し、何について話すかを先に相手に提示し、相手の会話理解を助けることに重きを置いている。それに対して、中国人は言いよどみ表現を愛用し、自分側の整理に専念し、会話相手の理解に重きを置いていないと考えられる。

<<口頭発表>> (9月23日 16:05-16:35)

【K棟203】

日本語の雑談における物語の後続文脈への展開方法

張 未未

本発表では、日本語の雑談における物語の後続文脈への展開方法を、日本語母語場面と日中接触場面の比較分析から解明し、日本語の雑談の会話教育に応用することを目的としている。分析対象は、日本語母語場面と日中接触場面における親しい友人二者間の約30分の雑談各5組全10資料である。

雑談10資料から抽出した152例の物語の後続文脈への展開方法について分析をした結果、母語話者は学習者と比べ、物語についての意見を挟み、話題の一貫性を保ちながら話を展開することや、物語を終えた後に物語以前の文脈に戻して話題を再開することが多いことが明らかになった。それに対して、学習者は雑談全体の中での物語の役割が捉えられず、物語に関連したことを話題にして話を前に進めることが多い。このことから、日本語教育においては、談話全体の文脈を踏まえた話題展開の指導の必要性が示唆されたと考えられる。

<<口頭発表>> (9月23日 14:20-14:50)

【L棟102】

連鎖全体への反応として使用される「へー」の働き

関 玲

本研究の目的は「語りの連鎖」と「話題上関連性のある一連の連鎖」が完結可能な位置に至った後に産出される「へー」の相互行為上での働きを明らかにすることである。会話分析の手法を用いて分析した結果、「へー」の産出者は、その連鎖環境及び身体的資源の利用を通して、直前のターンへの反応として「へー」を産出しているのではなく、「連鎖全体」への反応として産出していることを明らかにしている。また、「へー」を用いて連鎖全体への反応を示す際の連鎖環境の特徴として、連鎖全体の中に話者にとって何か想定外のことあるいは価値があることについてのやり取りが含まれていることが挙げられる。即ち、話者は、直前で述べられていることについて「驚き、関心」などを示しているわけではなく、連鎖全体をそうしたやり取りが行われたものとして特徴づけ、評価することによって、その連鎖の全体を収束し次の新たな連鎖に移行する準備を整えていると言える。

<<口頭発表>> (9月23日 14:55-15:25)

【L棟102】

フィラー「まあ」の中心的機能は何か
—日常会話と大学講義の用例から—

柳澤 浩哉, 馮 文彦

大工原 (2010) はフィラー「まあ」の意味を次のように整理している. A.但し書き的用法, B.強調的用法, C.なだめ用法, D.驚き用法, E.程度副詞. だが, 大学講義と日常会話のフィラーの用例を集めると次の事が分かる. (1) 「まあ」「ま」にはA. ~E. に該当しない用例が多く存在する. (2) 「まあ」「ま」の多くが自分の体験・意見を言う時に出現している. 特に, 講義の「まあ」「ま」は5~8割がこれである(講義により異なる). なお, 意見は「思う」「考える」等を含む文とした. (3) 日常会話では, 尊大や謙遜の含みを感じさせる「まあ」「ま」が多い.

以上から次の予想が立てられる. 「まあ」は, 自分の体験や意見を語る箇所に出現し, それが個人的見解であることを「あからさまに」確認する機能を持っている. 先行研究で指摘している意味および謙遜・尊大の含みは, そこから生まれたのではないか.

<<口頭発表>> (9月23日 15:30-16:00)

【L棟102】

呼びかけの重ね用法出現の要因
—フィクションの話し言葉という可能性—

東出 朋

呼びかけ語の重ね用法は小説の会話文では頻繁に観察されるが、現実の話し言葉では非常に観察されにくいという事実がある。フィクションの話し言葉（金水2014）とリアルな話し言葉になぜ重ね用法の使用差が生じるのかを検討するのが本発表の目的である。フィクションの話し言葉では対称名詞単独、対称人称詞単独で表現すると次の2点の問題がある。（1）対称人称詞だけでは誰が誰に発しているのか読者に伝わりにくい。（2）パラ・メタ言語的情報がないためデフォルトの対称名詞だけでは評価性表出が不足してしまう。それぞれの問題を解決するのが折衷案としての重ね用法である。作者は（1）読者に向けて対称名詞を、そして（2）パラ・メタ言語的情報を語彙的に表現するために対称人称詞を使う。リアルな話し言葉に観察される重ね用法は引用節内であり、重ね用法によってフィクション的な要素を提示していると考えられる。

<<口頭発表>> (9月23日 16:05-16:35)

【L棟102】

韓国語の尊敬形'-si-'の不使用状況に関する一考察
—ドラマの台詞をデータとして—

金 アラン

日本語の「お+連用形+になる」や「～られる」に相当する韓国語の尊敬形-si-は、日本語の尊敬形より使用範囲が広く、たとえば大学1年生が2年生に対してや1歳年上の職場の同僚に対しても使用される。しかし、すべての発話に-si-が使われるわけではない。これまでの研究では、-si-が使用される状況については注目されてきたものの、-si-が使用されない状況についてはほとんど言及されてこなかった。

本発表では、普段-si-を使用する相手に対し、どのような状況で-si-が使用されないのかをドラマの台詞を用いて明らかにする。分析の結果、(i)相手を非難する時や相手に対して怒りを表す場合、(ii)命令形を用いているが、相手への負担度が低い場合やその要求が聞き手のためである場合、(iii)相手に対する敬意を表す時間的な余裕がない瞬時的な発話で-si-が用いられない場合があることが分かった。

<<口頭発表>> (9月23日 14:20-14:50)

【L棟104】

「身振り」に男女差はあるのか？
—中国語母語話者の不同意表明を例にして—

趙 東玲

本稿では不同意の表明の際、どのようなノンバーバル行動が伴うのかに関する考察の一環を取り上げ、中国語母語話者の「身振り」の特徴を明らかにし、(1)不同意の強さを強調する機能を持つ顕著なノンバーバル行動は存在するのか、(2)そのようなノンバーバル行動は存在することが認定できれば、その表出は性別上に違いが存在するのか、といった2つの研究課題を設けて考察を行った。男性・女性同士の会話、それぞれ127分24秒と120分14秒のデータに基づき、以下の結果が得られた。(1)「行為的な手振り」は不同意の強さと係わっている。(2)男女差がある。具体的には、①女性は男性より不同意にかかわる身振りを多く使い、男性より対人距離が近い。②相手に「反対発話」を発する際、女性は男性より相手の領域に踏み込みやすく、男性は女性より話者自身の領域を強調しやすい。③逆に、相手に「陳述発話」を発する際、女性は男性より話者自身の領域を強調しやすい。

<<口頭発表>> (9月23日 14:55-15:25)

【L棟104】

『商標言語学』

—商標の類似性判断における音韻論及び認知言語学的アプローチ—

五所 万実

本研究は、言語学における実社会への貢献のあり方を示す一研究として、商標登録の審査過程等において問題となる商標の類似性について言語学的観点から分析するものである。商標の類否は、主に商標を構成する外観（見た目）、称呼（呼び方）、観念（意味合い）を全体的に観察し、それらが需要者に与える印象、記憶、連想等を総合して判断するとされている。商標審決を分析し類否判断プロセスの傾向を探った結果、商標の類否判断においては、語の一体性あるいは要部（独立して識別力を有する部分）の認定が大きく類否結果に左右することがわかった。これを踏まえ、本研究は商標の称呼上及び観念上の一体性について、複合名詞のアクセント規則や構文、フレーム等の概念を援用し、音韻論及び認知言語学的観点から考察を試みる。また、商標の言語構造を明らかにした上で、商標機能において鍵となる自他商品識別力や要部認定へのアプローチについても言及する。